比較文化論叢12　　2003年９月15日　　札幌大学文化学部

大森郁之助 教授　川上徳明教授　柴田勗教授
定年退職記念号

〔黎明期・北海道のフートボールの胎動〕
―伝道師役を果した２人のデ・ハビランドの謎―

柴田　　勗

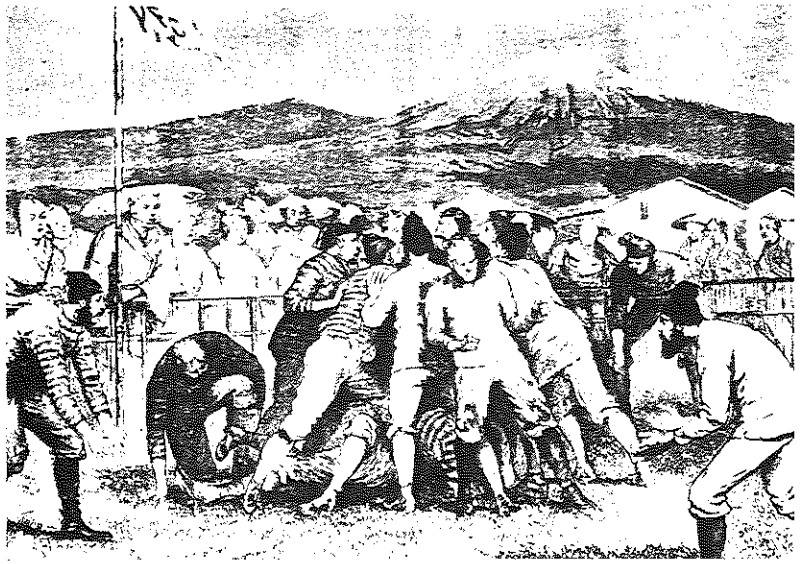
〔黎明期・北海道のフートボールの胎動〕
―伝道師役を果した２人のデ・ハビランドの謎―

柴田　　勗
（札幌大学名誉教授）

1．英国伝来のフートボール

明治維新間も無い1873（明治６）年、渡来スポーツ文化の先駆けとして、イギリス発祥の「フートボール」Footballと、アメリカ発祥の「ベースボール」Base Ball（明治５年渡来説もある）が相前後して日本に紹介されている。これが、その後、日本の双壁を形成する２大球技の初発の基点となるのである。宗主国英国の「フートボール」は、1863（文久３）年、ロンドンにおいて英国内のルールの統一化をめざした11のクラブの代表によって、フットボール協会「フットボール・アソシエーション The Football Association」（省略ＦＡ）が結成されている。日本に紹介されたのは、その10年後のことである。日本での「フートボール」Footballは、時代とともにその名称を変え、初期の解釈では「フートボール」（蹴鞠の一種）から、アッソシエーション・フットボール（ア式フットボール）→蹴球→サッカーと呼ばれるようになった。渡来当時のサッカーボールは、動物の膀胱のまわりに牛の皮を丸く縫い合わせて作られたボールか、丸い牛皮の球の中に毛髪かぼろぎれを充填させたボールと想定され、牛皮の球の中にゴム製の中袋（チューブ）を入れる近代型のボール《1800年代はゴムが世界的に貴重品であり、ゴム工業も未発達で、1872（明治４）年ボールの規格が統一されるまでは、大きさも重さもまちまちであった》が、はたして日本の始期に使用されていたかは定かではない。中林敏雄が「最新サッカー大辞典」の「サッカーの技術・戦術の変遷」の中で、トマス・ヒューズの「トム・ブラウンの学校生活」（1857年）の一文を引用し、当時のドリブル型サッカーとボールのかかわりについて解説

を加えている。「蹴られたボールが〈ドサッ、ドサッと鈍い音：You hear the dull thud thud of the ball〉をたてて落下すると述べたところがある。この表現からは、動物の膀胱を革袋でおおったボールが、軽快にバウンドすることも、勢いよく転がることもなかったらしい様子が想像され、このころのサッカーが、ドリブルを中心的な技術とせざるをえないものであったことが想像される」。たしかに、近代現代にかかわらず球技のゲーム様態は、ボールの形体や材質によって変容するので、当時のボールの質が気がかりではある。日本蹴球協会編「日本サッカーのあゆみ」1974・講談社の挿し絵1873（明治６）年（文献写真引用１*）を見る限りでは、弾みのないボールに群がるラグビーゲームの様子を呈した、きわめて、英国のＦＡルールの統一化された前後に繰り広げられたと思われる相似のゲーム風景が描写されている。これらのことから、明治初期の英国伝来のサッカーは、弾まないボールでオフサイドルール（最初の



1873（明治６）年、横浜居住のイギリス人のプレー
ダグラス少佐とは関係ない。イングランドの協会ができて10年めだから、日本にいる外人のプレーはまだサッカーとはいいきれない。富士が見えるし、男女とも日本人の当時の風俗である。
※日本蹴球協会編（1974）「日本サッカーのあゆみ」より引用・転載

ルールは、プレーヤーがボールをキックしたとき、そのボールより相手側ゴールに近い位置にいる同じチームのどのプレーヤーもオフサイドの反則となる）が厳しいことから、必然的にドリブル突破型のゲーム展開となり、ボールを中心に「押しくらまんじゅう的」サッカーであったであろうと推測している。

2. 伝道師役の英国人フットボーラーの動静

－軍人から教師へ－

英国で発祥したＦＡ式サッカーは、英国中世期ころからの村落対抗フットボールの熱波が数多くの禁止令にもかかわらず相伝し、あらゆる階層にも広がりを見せて、球を蹴る魔力にとりつかれた、フットボールの渇望遺伝子を持った、多くの若者たちが、粗暴で土着性の強いサッカーを近代サッカーに変革させていった。

特に、ＦＡルールの統一化の原動力となった、パブリック・スクールの出身者たちは、大英帝国の旗印のもと、世界各国の港から港へ立ち寄る際の主要な幹部であり、英国人の脚に宿した魔力のＤＮＡを、寄港した先々でフットボール的に流露させたのである。

このごく自然な英国人の渡航者たちによるスポーツ的パフォーマンスが、寄航先の国々にニュースポーツとしての文化移入の機縁となっていったのである。我が国においては、1862（文久２）年刊行の「横浜開港見聞誌」に、ベルナードEV. Bernardの手記が載っており、(注1)「サッカーというゲームは、日本では1859年に横浜港が開かれた年に英国の軍人たちによってはじめて行われた」とあり、史実的には定着し得なかったが、1859（安政６）年、横浜、長崎、箱館を開港したことによって訪れた、英国人の渡航者が、長い船旅の後のレクリエーションとして英国土着のパブリック・スクール・フットボールをちょっとした広場で楽しむ場景は容易に想像できる。しかし、日本サッカー史にとどめられているのは、1873（明治６）年の秋、東京築地にあった海軍兵学寮に迎えられていた英国海軍の副艦長アーチフォールド・ルシアス・ダグラス少佐

とその部下33人の軍人と共に、訓練時の余暇のレクリエーションとして日本人にフットボールを教えたことが、今では定説とされている。

その後の伝道者は軍人から教師に変り、「異人さんの蹴鞠」と見聞した時代から、学生や生徒たちが英人教師の指導によって、簡易型のサッカーを楽しむようになっていく。

3. 在留英国人教師の萌芽期におけるサッカー指導

・1874（明治７）年に赤坂の工学寮（後の東京大学工学部）に迎えられていた、英国人講師ライメル・ジョンズが学生とともにボールを蹴った。（日本サッカー協会75年史より）

・1878（明治11）年に文部省がアメリカからＧ・Ａ・リーランドを招いて体操伝習所（後の高等師範学校・体操専修科）を開設し、坪井玄道とともに、「FooTBALL」の紹介書を出し、英国サッカーの全容を学生に知らしめた。（日本蹴球協会編、「日本サッカーのあゆみ」より）

・1904（明治37）年９月に金沢の第四高等学校（後の金沢大学）から、スコットランド生れのイギリス人、デ・ハビランドが東京の高等師範へ転勤してきた。……東京高師では、大塚の新校舎へ移転も終わり、教室の窓外にゴールポストが定置されたグランドを眺め、……デ・ハビランドは、日本語で冗談の少しはいえるようになっていた。……。

デ・ハビランドは「余本校に来り、初めて日本に於ける理想的フットボールをみたり」といったとも記録されている。……。

デ・ハビランドのことは第四高等学校の蹴球部史には何も記録されていない。高等師範側の記録を見ると、1904（明治37）年12月10日に、金沢でフットボールを教わったという東京帝大の学生数名が旧師を慕って大塚へ来て、一緒に練習試合をしたと記されている。……。

（日本蹴球協会編「日本サッカーのあゆみ」より）

明治初期に指導した、ライメル・ジョンズや、Ｇ・Ａ・リーランドの時代はサッカーのルールや施設用具などが未整備で、ＦＡルールに準じたサッカーゲームのイメージや競技方法など実展開できる環境ではなかった。初期伝来から30年後のデ・ハビランドの時代には、サッカーゴールも用意されていて、ほぼＦＡ式サッカーゲームが行なえる環境になっている。

4.「函商百年史」と「東京教育大学サッカー部史」に登場するデ・ハビランドの謎

北海道のフートボールの最初の渡来地は、開港の早かった函館である。そして、外国人の指導を最初に受けたのも函館である。また、最初の指導者が、1899（明治32）年に赴任した英語教師のデ・ハビランドであることも明らかになっている。しかし、1974（昭和49）年発行の「東京教育大学サッカー部史」にでてくるデ・ハビランドと1989（平成元）年発行の「函商100年史」にでてくるデ・ハビランドを通覧対比し始めてから謎は深まっていった。英語名のフルネームが両文献に記載されていないこともあって、もしかすると同一人物なのでは？という新しい史実の掘り起こしへの期待と、デ・ハビランドに関する人物探査の妙味などに思いをかけ調査を始めた。まず、疑問を抱く切っ掛けとなった「函商百年史」の誌面にで出てくるデ・ハビランドに関する掲載文を抽出し、次に転載してみる。

『第一編　沿革〈全日制〉五学窓素描つれづれ「函商の外国人教師たち」

……この際、特記して置くべき事は、英人教師デ・ハヴィランドについてである。「スポーツ八十年史[注2]」に「わが国にフットボールを伝えたのは、東京高等師範学校の講師デ・ハビランド氏（イギリス）で、明治38年のころであった」と記載されているが、この英人デ・ハビランドが本校に赴任したのが、明治32年３月で独立後の本校生に英会話を教えるかたわら、日曜日などに公園でフットボールを教えたというから、もしこれが同一人であるならば、右の記載より[注3]６年も早い時期に、し

かも北海道の函館の地でフットボールが初めて伝えられたことになるわけである。』

（「函商百年史」155頁より転載）

『第一編 沿革〈全日制〉六運動・文化クラブの隆盛

その名もフートボールから蹴球部フートボールは本道の草分け本校のサッカーはおそらく北海道でも草分け的な存在であった。最初はフートボールと称し、蹴り上げて高さを競うなど、特に明治期のア式フットボール時代には本校の選手もワラジ履きという出で立ちでプレーしたものであった。独立五人男の一人である守谷忍（旧１回生）は「日曜日の遊びは常に谷地頭の運動場に行き、クリケットやフットボールなどにふけっておりました。教えたのは六尺以上ある教師で（名はピヤソンかネートルシップか忘れました[注4]）、帰りは公園に只一軒のダルマ桜餅屋で十銭にて満腹になりました」と、回想している。「ネトルシップ校長は又我が函館の運動界に忘るべからざる功労者である、氏が当時の中学生に初めて野球競技を教へた事、又ホッケーの（函館人はアヌベスと云う）競技を市民に知らせたことなどである」と、「函館百珍ト函館史実」（岡田健蔵著）にも指摘しているが、六尺以上ある教師とは同一人物なのであろうか。また一説に、本校には英会話の教師デ・ハビランド先生がいて、のち明治38年ころ東京高師でア式フットボールを教え、これがわが国で

地下たびをはくア式蹴球選手（旧９回生ら）1908（明治41）年ころ一濱崎州助（旧40回生）蔵
北海道函館商業高等学校（1989）「函商百年史」より

の草分けであるという。とすれば、本校在任中にフートボールの手ほどきをしたことは十分に考えられる。……。』

（「函商百年史」323頁より転載）

この掲載文から推考すると、函館商業／東京高師のデ・ハビランドは同一人物的または、同一人物としての推察が加えられている文章で、拠って立つ人物史料が示されてはいない。しかしながら、日本のサッカー史と北海道のサッカー史にとって、きわめて重要な人物であるので、この人物の謎解きは、さしせまった調査課題である。

5. デ・ハビランドの在任時追跡調査

1）. 函館の現地調査

「函商百年史」が刊行された1989（平成元）年の翌年夏から調査を開始し、初期調査地を函館とし、まず「函商百年史」の編集委員で、デ・ハビランドの調査を手がけられた前函館商業高等学校（以後函商）英語教師井上能孝氏に会い、デ・ハビランドに関する情報と在任を証明する資料を得たが、肝心な函商と金沢四校とを結ぶ転勤時の移動に関する発令資料等は、函商にも北海道庁文書館にも残されていないことがわかった。井上能孝氏より得たデ・ハビランドの記録に残されている名前と、在任を証明する資料は次のごとくであった。

・嘱託教員（兼）デ・ハヴ井ランド
　　（英）M・De・Havilland
・就任期間　1899（明治32）年３月31日から
　　1902（明治35）年３月31日まで

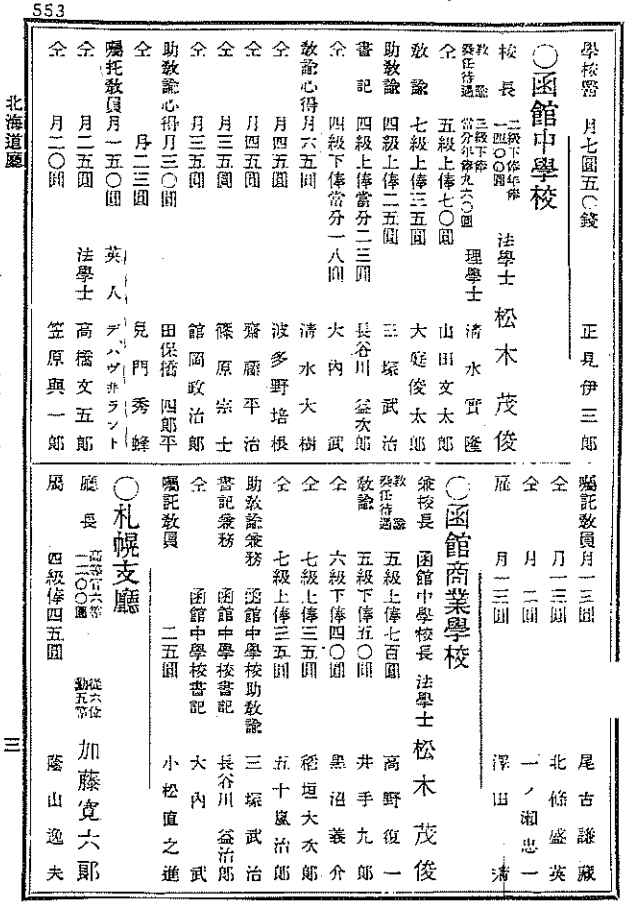
次いで、函館図書館に出向き、デ・ハビランドが函商を退職する前後の新聞記事の検索を依頼したが、1907（明治40）年の函館の大火時にほとんど焼失しており、デ・ハビランドの函商離任時の様子を知る資料が全くないことを知るに至った。このことにより、函商離任後のデ・ハビランドの足取りは不明のままとなって

いる。

（函商でのデ・ハビランド）

「函館商業学校同志会雑誌（第２号）1900年６月13日」によれば、1898

〔北海道庁教育関係職員録〕㊟



553

北海道廳教育関係職員録（明治32・11・1）

學校醫　月七圓五〇錢　正見伊三郎

○函館中學校

校長　二級下俸年俸一四〇〇圓　教員俸給三級下俸當分外俸九六〇圓　法學士　松木茂俊

教諭　教員俸給五級上俸七〇圓　理學士　清水實隆

全　七級上俸三五圓

助教諭　四級上俸二五圓

書記　四級上俸當分二三圓

全　四級下俸當分一八圓

教諭心得月六五圓

全　月四五圓

全　月四五圓

全　月三五圓

助教諭心得月三〇圓

全　月二三圓

囑托教員月一五〇圓　英人　デ、ハヴ井ランド

全　月二五圓　法學士　高橋文五郎

全　月二〇圓　笠原與一郎

囑託教員月一三圓　尾古謙藏

全　月一三圓　北條盛英

全　月一二圓　一ノ瀬忠一

囑託教員月一三圓　澤田清

○函館商業學校

兼校長　函館中學校長　法學士　松木茂俊

教諭　教員俸給五級上俸七百圓　高野復一

教諭　五級下俸五〇圓　井手九郎

全　六級下俸四〇圓　黒沼義介

全　七級七俸三五圓　稲垣大次郎

全　七級上俸三五圓　五十嵐治郎

助教諭兼務　函館中學校助教諭　三塚武治

書記兼務　函館中學校書記　長谷川益治郎

全　函館中學校書記　大内武

囑託教員　二五圓　小松直之進

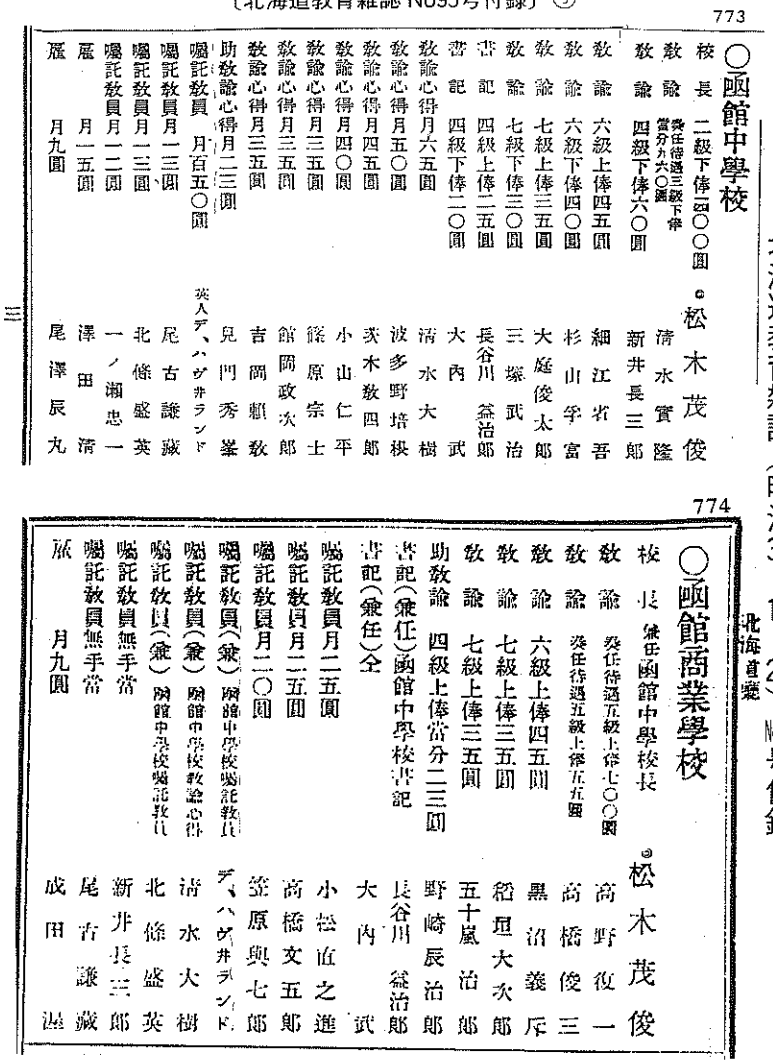
○札幌支廳

廳長　高等官六等一二〇〇圓　勅任五等　加藤寛六郎

屬　四級俸四五圓　藤山逸夫

三

〔北海道教育雑誌 No95号付録〕㊟



773

北海道教育雑誌（明治33・12・25）No.95号付録

北海道廳

○函館中學校

校長　二級下俸四〇〇圓　教員俸給三級下俸當分外六〇圓　松木茂俊

教諭　四級下俸六〇圓　清水實隆

教諭　六級上俸四五圓　新井長三郎

教諭　六級下俸四〇圓　細江省吾

教諭　七級上俸三五圓　杉山孚富

教諭　七級下俸三〇圓　大庭俊太郎

書記　四級上俸二五圓　三塚武治

書記　四級下俸二〇圓　長谷川益治郎

教諭心得月六五圓　大内武

教諭心得月五〇圓　清水大樹

教諭心得月四五圓　波多野培根

教諭心得月四〇圓　茨木敬四郎

教諭心得月三五圓　小山仁平

教諭心得月三五圓　篠原宗士

教諭心得月三五圓　館岡政次郎

教諭心得月三五圓　吉岡軍敬

助教諭心得月二三圓　見門秀峯

囑託教員　月百五〇圓　英人デ、ハヴ井ランド

囑託教員月一三圓　尾古謙藏

囑託教員月一三圓　北條盛英

囑託教員月一二圓　一ノ瀬忠一

雇　月一五圓　澤田清

雇　月九圓　尾澤辰丸

774

○函館商業學校

校長　兼任函館中學校長　松木茂俊

教諭　教員俸給五級上俸七〇〇圓　高野復一

教諭　教員俸給五級上俸五五圓　高橋俊三

教諭　六級上俸四五圓　黒沼義厚

教諭　七級上俸三五圓　稲垣大次郎

教諭　七級上俸三五圓　五十嵐治郎

助教諭　四級上俸當分二三圓　野崎長治郎

書記（兼任）函館中學校書記　長谷川益治郎

書記（兼任）全　大内武

囑託教員月二五圓　小松直之進

囑託教員月二五圓　高橋文五郎

囑託教員月二〇圓　笠原與七郎

囑託教員（兼）函館中學校教諭心得　デ、ハヴ井ランド

囑託教員（兼）函館中學校囑託教員　清水大樹

囑託教員（兼）函館中學校囑託教員　北條盛英

囑託教員無手當　新井長三郎

囑託教員無手當　尾古謙藏

雇　月九圓　成田温

三

（北海道庁文書館蔵）

※1899（明治32）年６月までは、函館中学校と函館商業学校が合併状態にあったので、校長を含め兼任の教員が多かった。デ・ハビランド（当時の職員録には、デ・ハヴ井ランドと記されている）は、函館中学校（現函館中部高等学校）の嘱託教員（託の字が托と誤っている）で函館商業高等学校には、この時点では発令されていない。

（北海道庁文書館蔵）

※1900（明治33）年12月25日付の北海道教育雑誌NO95号付録には、兼任として名前が入っている。ちなみに、外人教師の当時の年俸の高さがこの職員録でうかがえるが、松木校長の1400円に対してデ・ハビランドの年俸は1800円（月150円×12）という高額であった。

（明治31）年10月に同志会が運動部（フートボール、ベースボール、テニス、漕艇）を設立しているが、この後行なわれた第１回の例会にデ・ハビランドが出席した記録が残されていることと、すでに、1890（明治23）年ころから、函商生がフートボールを楽しんでいた伝記もあることから、サッカー宗主国の英国から来道したデ･ハビランドと、フットボール好きな函商生とのフットボールの交流が行なわれたのは、ごく自然な成り行きであったと考えられる。当時併設同士であった函館中学のフットボールに関する史料が見当たらないのが気になるが、1900（明治33）年５月の函館毎日新聞に「……兎に角函館中学の運動会は尚頗る不振だ」と書いているのを見ると函館商業生に比べて函館中学生はスポーツにあまり熱心でなかったのかも知れない。

２）．金沢四高（金沢大学）の調査から

1991（平成３）年９月　金沢大学の前身金沢第四高等学校（以下金沢四高）に在任していたデ・ハビランドの就任時および就任当時の情報資料を得るため、金沢大学図書館に出向いた。調査の結果、記録上の名前と就任期間が判明した。しかし期待を寄せた「金沢四高蹴球部史」にはデ・ハビランドの名や活動状況等に関する記述は見つからないとの説明を受ける。

・英語教師　デ・ハビランド
D・Havilland Walter Augustus（E・E）
・就任期間　1898（明治31）年８月から
1904（明治37）年７月まで

（金沢第四高等学校一覧より）

※過去の教職員の氏名が載っている「金沢第四高等学校一覧」によって、名前のイニシャルもわかり、前掲のフルネームを知ることができた。ここで、一方のイニシャル名が明確になったことで、函商のM・De・Havillandとの違いもほぼ明証されたとみて、両者はここで別人との見かたを強めた。また､両者の就任時期についても７ヶ月の違いがあり、同一人物が兼任しきれない遠隔地の函館と金沢に当時の文部省が兼任発令することも考えにくい。

次に両者の調査メモを参考として対比してみる。

〈デ・ハビランド氏の在任時追跡調査メモ〉

勤務校	函館商業高等学校	金沢第四高等学校
教師名	M・De・Havilland	D・Havilland Walter Augustus （W・A・De Havilland）
就任期間	1899（明治32）年３月31日 ～ 1902（明治35）年３月31日 ※離任後の消息については全く不明	1898（明治31）年８月 ～ 1904（明治37）年７月 ※日本蹴球協会編「日本サッカーのあゆみ」39頁、「デ・ハビランドの指導」の記述に「1904（明治37）年９月に金沢の第四高等学校からスコットランド生れのイギリス人、デ・ハビランドが東京の高等師範へ転勤してきた。」とあるので、金沢四高／東京高師のデ・ハビランドは同一人物であることがわかった。

３）．東京高等師範学校でのW・A・デ・ハビランド

1904（明治37）年９月～

東京高等師範学校（現筑波大学）におけるデ・ハビランドの動静については、日本サッカー協会史、東京教育大学サッカー部史、スポーツ関係事典類などに史伝的に残されているのが散見できる。特に、金沢第四高等学校（現金沢大学）からの転勤後の学生たちとサッカーの係わりなどについては、同時期にボールを蹴り合った学生ＯＢの筆録が残されているので、当時のW･A･デ･ハビランドのフットボール的教師像を垣間見ることができる。

次に、その史伝の主なものを転載してみる。

◎『日本スポーツ百年の歩み』1967（昭和42．9．30）
日本体育学会体育史専門分科会編 216頁

サッカー

伝来と普及　サッカーがわが国にはじめて伝えられたのは明治初期のことであり、明治７（1874）年ごろ、イギリス人教師ジョンスが工学寮において、また同11年ごろ体操伝習所でアメリカ人リーランドが､「フートボール」を紹介したという記録が残っている。しかし、競技としての練習は明治30（1897）年代の終わりごろになって

から、高等師範学校の生徒たちによって始められた。

同36年に、イギリス人教師デハビランドが来日し[注5]、彼の指導によってフットボールを研究し、同年10月４日には「アッソシエーション・フットボール」を鐘美堂より発行した。横浜外人クラブと試合をするようになったのは明治37年２月からで、同40年には築地の外人少年チームと試合を行なった。高師の指導を受けた東京府師範にチームが結成され、日本人同士の最初の試合が行なわれたのもこのころであった。

◎『図説サッカー辞典』1971（昭和46．4．20）

新田純興、福島玄一、多和健雄、村岡博人、講談社 46頁

日本ではどのように育ってきたか

「……。東京高師では同年[注6]３月運動会を設立し、……フートボール部……８部に分かち……」とある。講師デ・ハビランドDe Havirand[注7]の指導で力をつけ在京英人や横浜外人と試合をするようになったのは明治37年以降、40年には東京府師範学校（後の青山師範）や慈恵医専との試合も始まった。

◎『日本サッカーのあゆみ』1974（昭和49．2．4）

日本蹴球協会編　講談社日本蹴球協会創立満50年記念出版 39頁

●デ・ハビランドの指導

「日本に於ける理想的フットボールをみたり」

1904（明治37）年９月に金沢の第四高等学校から、スコットランド生まれのイギリス人、デ・ハビランドが東京の高等師範へ転勤してきた。

このときは、日露戦争はまだ黄海の戦いがすんだ初期の時代だった。東京高師では、大塚の新校舎へ移転も終わり、教室の窓外にゴールポストが定置されたグランドを眺め、松平大学頭がつくった占春園という立派な庭池もあり、環境をじゅうぶん楽しんでいたところだった。

デ・ハビランドは、日本語で冗談の少しはいえるようになっていた。よくユニホームをつけて運動場へ現われ、ドリブルやヘディングの実地指導をしてくれた。

デ・ハビランドは「余本校に来り、初めて日本に於ける理想的フットボールをみたり」といったとも記録されている。

デ・ハビランドは、築地にあった外国人子弟のグランマースクールの校長もやっていた関係で、のちにそこの生徒との練習試合のみちも開いてくれた。すでに坪井教授の手で横浜外人との接触が始まってはいたが、横浜はまだ遠隔の地という時代だった。東京で試合がやってもらえるなら、相手が中学３年生ぐらいの子どもでも喜んで試合をしてもらった。それは、やがて手塚にあった火薬工場の外人クラブやイギリス大使館員たちのTokyo Athletic Clubとの交際の始まる糸口にもなっていった。

デ・ハビランドのことは第四高等学校の蹴球部史には何も記録されていない。高等師範側の記録を見ると、1904（明治37）年12月10日に、金沢でフットボールを教わったという東京帝大の学生数名が旧師を慕って大塚へ来て、一緒に練習試合をしたと記されている。デ・ハビランドの在任が短かったことと、金沢という土地にはまだ蹴球の素地がなかったことなどのために、四高の蹴球部史ではまったくこれを知らなかったのではないだろうか。まことに残念に思われてならない。

●横浜外人と２度めの対戦

「……1905（明治38）年１月28日に横浜外人と２度めの試合をやるまでは、花々しいことなく、デ・ハビランドの実地指導を軸としてプレーの向上を図っていたようだ。デ・ハビランドとしてはたいした力の入れようで、このときは自分もＣＨとして高師チームを率いて戦っている。しかし前半45分を終わったときは、５：０という惨敗で全く歯が立たない。そこで後半は、外人との試合経験を得させるため全部の選手を交替させて同じ相手と対戦させた。相手は前半の疲労もあったのであろう、後半は１：１で合計すれば６：１の敗

北だった。

◎『東京教育大学開学100年記念
東京教育大学サッカー部師』1971（昭和49．2．10）
東京教育大学サッカー部　恒文社

4．明治38年

《蹴球部》－校友会誌第６号（２月刊行）54・55頁

……。

本校の教師としてデハヴィランド（De Havilland）先生を得たるは実に当部の為に祝すべし。先生や熱心にして且つ熟練なるフットボールプレーヤーなれば我が部員は幸いにその指導の許に百練することを得べければなり。デ氏嘗て云えりしと「予本校に来るに及んで初めて日本に於ける理想的フットボールを見たり」。この賛詞また当部の誇りとなすに足る。これについてたまきの君は「先生の賛詞敢て当たらずと雖も是れ即ち我等が理想とする所なり。理想宜しく高遠なるべし、偉大なるべし。区々たる勝敗もとより問う所に非ず。要は全国青年学生の元気振作をはかるにあり」という。……。

12月10日午後より本校運動場にて金沢四高の出身、かつてデハヴィランド氏の指導のもとに此の遊戯を練習せし人々にて、今大学に在る諸氏数名とゲームをなす。是れやがて対校フットボールゲームの端緒とも申すべし。ゲーム終わりては有朋館にて茶話会を催し、先生も出席したまい互いに歓をつくして再開を契りぬ。……

《蹴球部》－校友会誌第７号（６月刊行）

……。

横浜外人対応マッチ　１月28日（土曜日）、天気雨模様なれども、選手二十有余名は、横浜に向かう。

第１組　堀・栗野・新帯・江坂・藤井・デハヴィランド・上田・瀬口・渡辺・桜井・前田

第２組　石川・嶺・栗山・重山・大橋・荒木・目黒・奥津・中川・富田・渡辺

我等は、よし敗るることありとも、昨の敗に懲りては、見苦しからざ

るを期せり。デハヴィランド先生、自から中堅となりて、午後１時開戦す。……。

《蹴球部報告》－校友会誌第９号（３月刊行）62頁

○東京築地外人対抗試合

築地在留外人、デハヴィランド先生を介して対抗ゲームを申込み来たれり。よって我が部は之れに応じて、大会当日、即ち２月17日午後２時より本校校庭に於てゲームを開始す。東京に於て外人とのフットボール試合は初めてなれば之れを観んとて来たる者、声援せんとて集まる者甚だ多し。

審判官は英国公使館書記官ホーン氏にして斯道に名の聞こえたる人なり。……

6．明治40年

《蹴球部》－校友会誌第12号（３月刊行）73頁

○対築地外人マッチ

元本校教師[注8]デハヴィランド先生の指導の下にある築地外人学校生徒とのマッチを行なわんと、デハヴィランド先生を介して交渉するところあり。快諾を得て客歳11月24日に行なう筈なりしが、病気のため外人方のチームに欠員を生じて延期となり、更らに２月２日を期し、本校フィールドに於てマッチを行なうを約したりしが、又々彼方のチームに欠員を出じ、已むなくシックスアサイド[注9]にて戦いたり。２対１にて我れの勝となる。次にミックスゲームを行なう。

6．2人のデ・ハビランドの謎を解く「函中百年史」

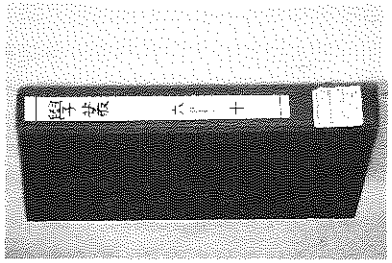
２人のデ・ハビランド氏の在任時追跡調査のその後の進展は、函館の大火による明治後半の重要な歴史的資料の消失と、金沢大学における明治期の外人教師に関する公的資料等の鮮少さから２人の因果を探りきれずにいた。この間「函商八十年史」ならびに「函商百年史」の編集委員の井上能孝氏の協力を得て、文部省や道庁などの公的な発令関係の文書

が提供され、時代・人物の考証の側面を確かめることができた。しかしながら、2人のデ・ハビランドの因果を確定できるところまで迫ることはできなかった。

その後、1995（平成7）年12月「函中百年史」(注10) が出版されるに至って、デ・ハビランドに関する情報入手 (注11) が急展開を見ることになる。この「函中百年史」の中に、デ・ハビランド調査に関する寄稿文が掲載されていることから新たな2人のデ・ハビランドに関する史実が明かになっていった。この寄稿文は、1994（平成6）年3月8日付日本経済新聞の“交遊抄”に「女優の父の足跡」と題して若林利次氏 (注12) が執筆したことが機縁となって、「函中百年史」の編集委員から若林利次氏に対して「女優の父の足跡」を中心とした寄稿文の依頼が入り「女優の父の足跡デ・ハビランド先生兄弟のこと」と題して「函中百年史」に執筆掲載

唯一残存していた〈函館中学校のデ・ハビランドに関する資料〉

函館中学校々友會「学叢」第九号　1902(明治35)年6月5日



（上左）函館中学校々友会「学叢」が創刊号から収蔵されている市立函館図書館
（下左）「学叢」第九号の標題紙
（上右）「学叢」の元本は合冊されている
（下右）「学叢」第九号の「函館だより」にデ・ハビランドの動向が記述されている

されたものである。この寄稿文によって、2人のデ・ハビランドの当時の動静が明らかにされていき、旧函館中学／旧函館商業学校／旧金沢四高／東京高師の赴任に関する謎も解けたのである。このことから、主題にかかわる日本および北海道の黎明期のフートボール指導における史実の不確実さを、一部批正できるところまで攻究できたことは得難い経験となった。

函中／函商時代の
G・M・de・Havilland（兄）
（1870年生れ）
函商百年史より転載

東京高師時代の
W・A・de・Havilland（弟）
（1872年生れ）
東京教育大学サッカー部史より転載

7. 謎の2人のデ・ハビランドは兄弟であった

若林利次氏がデ・ハビランドの足跡調査をはじめた切っ掛けは、慶応大学の8年先輩にあたる船坂真一氏からの調査依頼を受けたことからということになるが、船坂真一氏は、パリ在住のウォルター・アウグスタ・デ・ハビランド（弟）(注13) の長女の家族と縁故があり、その長女家族が、父の実兄のジョージ・メイランド・デ・ハビランドを含めて、2人が過ごした「日本の足跡を訪ねる旅」を構想中で、父親兄弟2人の日本での

史伝などを確かめた上で訪日スケジュールを組みたい。特に父親兄弟が最初のころ同時に居住したと思われる函館での動静を知るため、函館在住で函館の事情に詳しい若林利次氏に調査依頼が届いたのである。その後若林利次氏らの調査によって、函中／函商のジョージ・メイランド・（G・M）が兄であり、金沢四高／東京高師のウォルター・アウグスタ（W・A）が実弟であることを突き止めている。

これまで、謎であった２人のデ・ハビランドが兄弟であったことが確認されたことで、明治後期の学校におけるフートボール指導で名を残した二人のデ・ハビランドの人物像が捕捉できるところまでに行きついた。

このたびの、若林利次氏らの調査結果が前出の寄稿文中に掲載されているので、その主要な事項を要約し記載してみることにする。

『女優の父の足跡デ・ハビランド先生兄弟のこと』
北海道函館中部高等学校創立100周年記念誌「潮流」の要約

ジョージ・メイトランド・デ・ハビランド George Meitland De Havilland（兄） （G・M・De Havilland）	ウォルター・アウグスタ・デ・ハビランド Wolter Augustus De Havilland（弟） （W・A・De Havilland）
1893（明治26）年　弟ウォルターより先に日本に在留 兄弟２人が函館に居住していた時期があるとみられている 1898（明治31）年　横浜の男子学校ウイントン・ハウスの副校長 1900（明治33）年　函館中学／函館商業 1902（明治35）年　上記校退職 ※1902（明治35）年　６月５日付の函中校友会誌「学叢」第９号函館だよりの項に「永らく本校に職をとられしハビランド先生は４月本校を辞され、清国に向け出発近く米国の某学校に赴任される由に候、……」	1893（明治26）年　ケンブリッジ大学神学科卒後実兄Ｇ・Ｍ・デ・ハビランドのいる日本に向かう 1893（明治26）年　函館の宣教師ウォルター・アンドリウス師のもとで子弟に対する英語の個人教授をする 1896（明治29）年　神戸乾行義塾の教員として転任 1898（明治31）年　金沢第四高校 1904（明治37）年　東京高等師範学校 1906（明治39）年　上記校退職 ・東京麹町に事務所を開設 ・英国人女性と結婚 1916（大正５）年　長女オリビエ誕生 1918（大正７）年　次女ジョン・フォンティーン誕生 1920（大正９）離婚 ※２人の姉妹は離婚した母親と共にカルフォルニアに転居 昭和初期　東京駅前丸ビルに特許事務所を開設、英国人の日本特許出願代理人として弁理士となる ※日本女性と再婚
※（生れ年）1870年 札幌大学図書館調べ	（生れ年）1872年

〔フットボールのこと〕若林利次氏の寄稿文転載

「函館百年史」に次の項があります。

『……「スポーツ八十年史」に「わが国にフットボールを伝えたのは、東京高等師範学校の講師デ・ハビランド氏（イギリス）で、明治38年のころであった」と記載されているが、この英人デ・ハビランドが本校に赴任したのが明治32年３月で独立後の本校生に英会話を教えるかたわら、日曜日などに公園でフットボールを教えたというから、もしこれが同一人であるならば、右の記載より６年も早い時期に、しかも北海道の函館の地でフットボールが初めて伝えられたことになる。……

これも前述の通り当時の記録が苗字しか記載されておらず、また日本人は苗字で人を呼びファーストネームで呼ぶ習慣がないために、デ・ハビランド兄弟を混同したものと思われます。明治38年頃の東京高師の教員とは弟ウォルターのことであり、弟の方が「スポーツ八十年史」に掲載されたものと判断されます』。

このようなデ・ハビランド兄弟の解明によって、「函商百年史」第一編沿革〈全日制〉155頁「函商の外国人教師たち」の一文……「スポーツ八十年史」……に記載されているデ・ハビランドのフットボール指導に関する史実が手直しされなければならないことになる。

さらに関連して、日本体育協会発行の「スポーツ八十年史」191頁「サッカーの歴史」の中に記載されている「わが国にフットボールを伝えたのは、東京高等師範学校の講師ハビランド氏（イギリス）で、明治38年のころであったが、……」については、フットボールを伝えたとあるのはフットボール競技を伝えたの意味であれば、たしかに、当時の学校で正規のゴールを設置していたのは東京高師が最初とされているので、わが国に「ＦＡ式フットボール競技」を伝えた、とする記述は正しい。しかし、フットボールを遊びの形態または簡易形態を含め、足でボールを操作するゲームを包括する概括的定義に依拠するフットボールを伝えたと考えるならば、正規フットボール競技も概括的定義に属するひとつのゲーム形態にすぎないので、わが国に初発のフットボールを伝えたとするデ・ハビランド説は成り立たないことになる。その例証として1873

（明治６）年アーチフォールド・ルシアス・ダクラス少佐以下33人が海軍兵学寮でフートボールを教えたとする、正規競技形態に至らない、概括的定義に属する初期のフットボールを、日本サッカー協会史は日本のサッカーの始期と定説化していることがあげられる。

８．金沢四高／東京高師のＷ・Ａ・デ・ハビランド先生（弟）はアカデミー賞女優姉妹の父親だった

日本のサッカー史に名を残した、弟のウォルター・Ａ・デ・ハビランド氏は、単に英語教師にとどまらず、スポーツマンで博識家としても知られ、近代日本の技術立国化の始期における知的所有権の国際化の礎石づくりに埠益する、当時の最先端の国際弁理士として活躍している。この活躍中の1937（昭和12）年ころに、すでに女優オリビエの父としても知られていた[注14]。その後、妹のジョン・フォンティーンも女優となり、日本生まれの姉妹女優として親しまれ、1941（昭和16）年、妹のジョン・フォンティーンが“断崖”でアカデミー主演女優賞を受け、追って1949（昭和24）年姉のオリビエが“女相続人”でアカデミー賞を受賞して、姉妹ともにアカデミー賞女優として一世を風靡することになる。特にオリビエ35～６歳の時に演じた“風と共に去りぬ”は世界映画史上不生出の名画として、今でもその名声が流伝している。その父としてのウォルター・Ａ・デ・ハビランド氏の人となりは、若林利次氏が1994（平成６）年３月８日付の日本経済新聞「交遊抄」に投稿した「女優の父の足跡」の文面を見た、ウォルター・Ａ・デ・ハビランドを知る読者からの手紙が、端的にその人物像を描き出している。その一文を[注15]転記してみると、『1976年誠文新社発行名誉九段瀬越喜作氏著「現代囲碁文庫Ⅱ」に“英文の碁書”という項があり、デ・ハビランド氏著の“碁のＡＢＣ”という本が次のように紹介されている。本は布製の表紙に美しく盤石と桜花が蒔絵になっている。最近の若い人にはデ・ハビランドといってもピンと来る名前ではないが、令嬢がハリウッドのスターといえばハハァとうなずかれるかも知れぬ。父親のデ・ハビランドさんは随分変わった人で、

四高の英語の教師をし日本女性を妻に迎えたくらいの日本びいきだが、生まれつき博才豊か、トランプ、チェス何でも来いの天才。碁も方円社に通い私（瀬越九段）も打ったことがある。数年間新聞の相場表で株を勉強の後、本物の株に手に出し大儲けした。“碁のＡＢＣ”は明治四十三年香港のケレン・ウォッシュ社の刊行で良質の紙を使用し印刷も外人好み、チェス流の碁盤、碁石も赤と黒という風変わりな稀有本』。と記述されていて、まさしく世界を感動させたアカデミー賞姉妹女優の芸術床の醸造元としての、ウォルター・Ａ・デ・ハビランドの博学多才で常に知的好奇心を横溢させ、感性が鋭く、思考回転の早い快活な人物像が浮び上がってくる。おそらく日本での生活は、変化を楽しみながらの豊穣さを味わっていたのではなかろうか。一方の兄ジョージ・Ｍ・デ・ハビランドの動向についての史料は乏しく、限られてはいるが、北海道サッカー史に残る最初の外国人のサッカー指導者として函館のフットボール的フィールドに刻印されていながら、その場景をつぶさに語る記録が残されていない。おそらく1907（明治40）年、1921（大正10）年、1934（昭和９）年の函館の大火が、函中／函商最初の外国人教師として赴任し、活動したもろもろの貴重な筆録類を回禄の災いにかかり烏有に帰してしまった結果と考えている。北海道の近代文化起動の函館であるだけに、北海道の文明開化の萌芽期からの進化課程を通観できないのは非常に残念としか言いようがない。

（付記）

現在まで北海道には、各地域ごと（14地区に下部のサッカー協会を組織している）のサッカーの沿革史を全道規模で体系化し総括的に集成されたものはなかった。少なくとも、昭和期のサッカーを語り継ぐ者が実存しているうちに、有効史料の集積など早めに取り組む必要性に駆られている。本稿は、その北海道サッカー史の編纂の起動として、北海道初発のサッカーが、明治期の函館であることから、函館のサッカー史伝に欠かせない主要な人物の一人、デ・ハビランドを追跡照査に書き下ろした雑文である

この調査にあたって、「函商八十年史」ならびに「函商百年史」の編集委員であった前函館商業高等学校の井上能孝氏に有効史料の提供と博捜などでお世話になった。

また、「函中百年史」にかかわる史料探索などで、函館中部高等学校教頭の松永務氏はじめ松尾功氏にもご協力をいただいた。さらに、デ・ハビランドに関する史実の不確実さの解明と探査の労を尽くされた若林利次氏には、貴重な掲載文の引用などで特段のご配慮をいただいた。ここにあらためて厚くお礼を申し上げる次第である。

平成15年5月18日
柴田　勗

（参考文献）

今村嘉雄他（1976）「新修体育大辞典」不昧堂出版
オルドジッフ・ジェルマン（1977）「世界サッカー史」ベースボール・マガジン社
岸野雄三（1987）「最新スポーツ大事典」大修館書店
国吉好弘（2001）「サッカーマルチ大事典」ベースボール・マガジン社
柴田勗（2001）「北のサッカーアンビシャス」1月・2月・3月スポトレンド
立脇和夫（1996）「ジャパン・ディレクトリー」第25巻　まに書房
東京教育大学サッカー部（1974）「東京教育大学サッカー部史」恒文社
中村敏雄（1973）「スポーツとは何か」ポプラ社
新田純興他（1971）「図説サッカー事典」講談社
日本サッカー協会（1996）「日本サッカー協会75年史」ベースボール・マガジン社
日本蹴球協会（1974）「日本サッカーのあゆみ」講談社
日本体育協会（1959）「スポーツ八十年史」
函館サッカー協会（2000）「函館サッカー協会70年史」
函館商業学校同志会（1900）「函館商業学校同志会雑誌」第弐号
北海道函館商業高等学校（1969）「函商八十年史」
北海道函館商業高等学校（1989）「函商百年史」
北海道函館中部高等学校（1995）「函中百年史」

（注1）「図解サッカー辞典」1971年、新田純興・福島玄一・多和健雄・村岡博人、（講談社）46頁より引用。
（注2）『スポーツ八〇年史』1959、日本体育協会発行 191頁
「サッカーの歴史」サッカーの起源、前文省略…。わが国にフットボールを伝えたのは、東京高等師範学校の講師デハビランド氏（イギリス）で、明治38年のころであったが、わが国最初の試合は明治40年11月、高等師範とそのコーチを受けてこれをはじめた東京府師範（のちの青山師範）の間に行なわれた。もっとも…省略
（注3）「函商百年史」は縦書きのため右の記載となっている。
（注4）ピヤソンかネートルシップと書かれているが、函商の旧職員名簿には出てこない。ネートルシップは、1892（明治25）年アイヌ学校を開校

した校長で、函商の教員ではない。守谷忍（明治33年卒）氏の一文は、「函商80年史」の中で「第一回生の思い出」として投稿した文章の一部である。この文章の中の記憶にある先生として、正確に多くの先生の名をあげているが、その列記の中にデ・ハビランド（会話）と記している。
（注5）W・A・デハビランドの在任時追跡調査（1991．9 柴田勗）で、金沢第四高等学校（現金沢大学）に1898（明治31）年に赴任している。その後高等師範学校に転勤しているので、来日は明治36年ではなく、明治31年に訂正すべきである。
（注6）同年3月とあるのは、明治29年3月のことである。
（注7）De Havirand は De Havilland の誤りである。金沢大学図書館、ならびに、幕末明治在日外国人・機関名鑑：ジャパン・ディレクトリーで照合済
（注8）W・A・デ・ハビランドの東京高等師範学校の離任時期は、明治40年≪蹴球部≫校友会誌第12号（3月刊行）の「対築地外人マッチ」の冒頭記述に元本校教師と記されており、明治39年≪蹴球部≫校友会誌第8号の東京築地外人対抗試合、…デハヴィランド先生を介して…には離任を示す文頭記述はない。このことから、離任時期は明治38年～39年の間と考えられる。
（注9）明治40年以前に「シックス・ア・サイド」に関する史実が見当らないのと、競技として行なわれた事実もないことから、この明治40年に行なわれた東京高師と築地外人との6人制ゲームが日本最初のミニサッカーの初発とみてよい。
（注10）北海道函館中部高等学校創立100周年記念誌「潮流」の略称
（注11）デ・ハビランドの調査開始頭初から、情報収集に協力してくれていた本学図書館情報サービス係の渡部毅氏から情報入手。
（注12）若林利次1950（昭和25）年　慶応大学卒、函館製網船具（株）相談役、前函館商工会議所会頭、函館中部高校の卒業生ではないが、勤務の関係で函館市に居住し、函館経済界のリーダー的存在として信望が厚く、函館の情報に精通している。
（注13）若林利次氏が、ウォルター・アウグスタ・デ・ハビランドが弟であることを確認したのは、船坂真一氏からのFAX文と、1900（明治33）年の北海道庁辞令、ザ・ジャパン・ダイレクトリー1902版、金沢第四高校（現金沢大学）名簿に記載されている氏名をもとに特定している。
（注14）1994（平成6）年3月8日付若林利次氏が日本経済新聞の「交遊抄」に投稿した「女優の父の足跡」の文面を見て、志方武氏（東京都国立市、昭和11年～15年までウォルター・A・デ・ハビランド特許事務所

担当の特許審査官だった人）が、「昭和12年頃オリビエさんがデビューされた当時、特許局内でも評判となり人気上々であった」と手紙を書いている。

（注15）上記「女優の父の足跡」の文面を見て、秋田県横手市、石田徹也氏が若林利次氏に手紙を書いたもの。